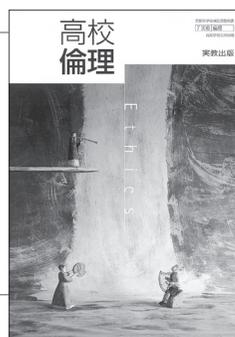


高校倫理

神奈川県立逗葉高等学校
宮崎 吾郎



この新刊の『高校倫理』は、これからの倫理教科書において、まさにスタンダードというべき存在になるであろう、と思う。この言明が必ずしも大言壮語ではないことを、以下に示していきたい。

第1に、それぞれの各章・各編のテーマ性をおさえつつも、思想史に準拠した配列・構成を持っていることである。実際に倫理を学んでいく生徒諸君にとっては、時系列にそって思想が紹介されている方が幸便であるだろう。また、教える側からは「思想史が教えやすい」ということにもなろう。使いやすさは、教科書の大切な要件の一つである。

第2に、本文はもとより、全編が詳細な記述であり、高いレベルで受験に対応しているということである。生徒諸君には、思想に肉薄するかのような高密度の本文を是非じっくりと読み込んで頂きたい。また、特に重要な概念は point として別に要約されており、学習に役立つだろう。さらに、小本文ではより発展的な内容についても、丁寧でより踏み込んだ解説がなされている。内容整理に役立つ図表が多数掲載されていることも見逃さない。

第3に、生徒諸君の知的好奇心に訴える、優れた学習素材を多く提供していることである。例えば、「放蕩息子のたとえ」、「ヘーゲルとナポレオン」といった囲み記事は、美しい図版と相まって、思想の息吹により一層親しむことを助けてくれるだろう。関心を引く人物紹介・名言が多数掲載されていることも挙げておきたい。

第4は、上の第3に関連してのことであるが、この教科書では、視覚的に関心を持たせる工夫が随所になされていることである。すべて人間は知ることを欲すること、これはアリストテレスの言を待つまでもない。しかし、生徒諸君の主体性を引き出し、

その知的好奇心を十分に喚起するには、従来にまして総合的なアプローチが必要となっていること、これは日々授業を行っている私たちが痛切に感じているところでもある。もとより、視覚によってイメージネーションを喚起し、思想の深遠をわかりやすく紹介することは、古来より試みられてきた。このことを、教科書というレベルにおいて、厳密性を保ちつつ達成させようというのが、この教科書の特徴となっている。以下、箇条書きで示そう。

①各節のはじめに、その節の内容を象徴するような絵画・写真を大きくレイアウトした導入部を設け、併せてその節で学ぶ内容を概観する解説文を提示している。学習が一段落したときに、また立ち戻って見て頂きたい。なるほど、こういうことか、と納得してもらえば、嬉しい。②視覚的に知識の整理ができる、まとめのページを配置してある（世界宗教の姿、日本の宗教・思想の展開、西洋近現代思想の系譜）。この数ページは、単に目を引くだけにとどまらず、深く学習内容を反省できるようなものとなったと考えている。例えば、現代思想をこのような枠組みでとらえ、系譜として提示した頁は、少なくとも倫理教科書では初めてのものではないだろうか。

③テーマ学習に使える編とびら（人間とは何か、歴史と人間）を設定した。人間存在を、広い視野から思索するにあたっての道案内となるように工夫した。

最後に、テーマ学習を含んだ3つの見開きページである。滋味にあふれたこの最終章が、本書はスタンダードな教科書であるとともに、一つの「作品」でもあることを物語っている。生徒諸君がこの教科書を通して倫理の学習を深めるとともに、倫理思想に、そして、それを紡ぎ出してきた人間について、より一層の興味関心を持たんことを願っている。